

ペンギンの会 ニュース

No.38 2019.5

ペンギンの会を支えてくださっている皆さん、いかがお過ごしでしょうか。わたしは今年もなんとか厳しい冬を乗り越えることができました。先日は、恒例のペンギンの花見にも出かけてきました。まだ五分咲きぐらいでしたが、ソメイヨシノを愛でることができました。2~3年前に右目を失明して、左目は光をとらえにくく見えづらいので、去年より遠くの景色がぼんやりと色あせましたが、手もと近くの蕾が本当に愛らしく、気分をほっこりさせてくれたので嬉しかったです。十年ぶりになるのかな。遊歩道では樹齢 300 年くらいの大木に直に手を当てて、樹から命のエネルギーを分けてもらってきました(笑) 来年も、桜を愛でることができますように…。

その前の3月19日には、東日本大震災・熊本地震・日本各地で起こった大震災の被災「障害」者救援カンパを、四条河原町のいつもの場所でおこなってきました。今回はメンバーがインフルエンザなど体調不良で参加できず、JCIL の皆さんも体調をこわされている方が多く、車いす「障害」者は5人でした。その日は寒さで体が震えるほどで、途中からは冷たい雨も降ってきたりで、いつも以上に厳しい3時間の取り組みになりました。わたしは前回の時に、声が出にくくなったので、声を出さないで口だけパ



クパクさせてアピールしたのだけれど、慣れない顎の運動でかえって顎もパンパンになり、頭痛も出てしまいました。だから今回は初めて、しっかりしたスピーカーを用意して、小さめの声でもアピールができるようにしました。みんなから「よく聞こえていたよ」と言ってもらえて、よかったです。でも、マイクがわたしには重くて、3時間あのように持ち続けるのはきつかったので、次回10月はその点を工夫しないとな、と思っています。

今回は3.11直後ということもあり、ビラを受け取ってくださる方も多かったと思い

ます。カンパの方も前回より入っていました。3.11の大震災から8年が経ちましたが、被災地ではまだまだ復興も遅れていますし、特に「障害」を持つ人たちは過酷な日常が続いています。被災した「障害」者に寄り添い、共に闘ってゆくためにも、街頭に立ち、被災地の現状を伝え続けていかなければいけないと思います。そしてわたしは、「障害」当事者だからこそ自分にできることを、考え続けてゆきたいと思っています。

もう20年前のことですが、アーノルドキアリ症候群で手術をする前に、ポレポレバンドで韓国のノレ(歌)を、釜ヶ崎の夏祭りや街頭などでも歌っていました。今回、スピーカーとマイクを手に入れたので、少しでも街頭の方が振り向いて関心をもってくださるよう、少しずつ練習して、また街頭で歌いたいです。体が今ぐらい維持できている間に実現したいな～、と考えています(歌は頭痛に障るのがネックなのだけど…)。

わたしも障害と病がこうしてあるけれど、命に関わることは絶対にあきらめてはいけなと思っています。わたしも弱い立場に置かれている人間だから、大震災で被災された方々の支援、野宿されている方々の支援、エイズに感染した子ども達への支援、入管で収容されている外国人への支援を通して、共に寄り添って皆さんと生きてゆきたいと思っています。

わたしも他者に関わってもらわなければ自立生活を維持できない立場です。介護にしても、そうしていろいろな人たちに介護への関心を持ってもらい、問題意識を持ち続けてもらうためには、介護をする側の人たちとの「きれいごとだけではない対話」が必要だと思っています。わたしは、「わたしを支えてくれている「介護」者の皆さんにも、わたしを必要としてもらいたい」、と思っています。きれいごとだけでは、よい人間関係は生まれません。現れた対立や緊張を経て、ゆるし合うことも必要です。

ペンギンの会のメンバーもいろいろとあり、今を維持させてゆくことに精一杯ですが、みんな工夫をしながら懸命に生きています。今回の街頭カンパに参加くださったJCILの皆さん、介護者の皆さん、ペンギンの会に関わっている皆さん、寒い中をお疲れ様でした。本当に感謝しています。次回もまた共に街頭に立ち、ビラを撒き、アピールして、被災地の現状を伝えて、この私たちが「風化させない」という意志を伝えてゆきましょう。

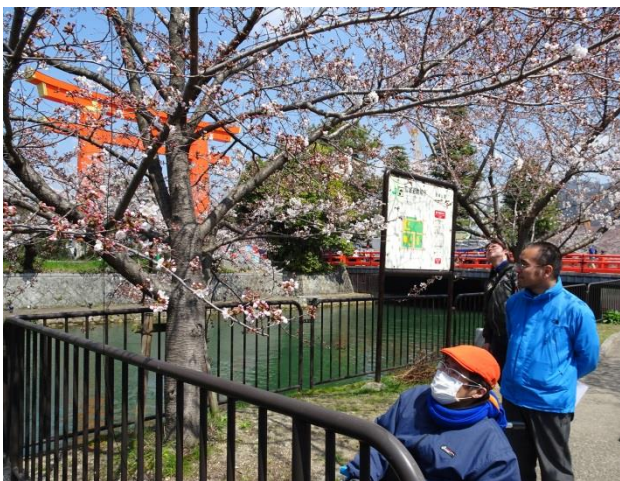
皆さまもいろいろあると思いますが、どうかしのいで、生きていってくださいね。今後とも、ペンギンの会を支え続けてください。よろしくお願いいたします。

ペンギンの会代表：李清美

『これが花見や！』

ユグチマコト（ユグ）

おかげさまでこの春も好天に恵まれ、大変良い花見をさせてもらうことができた平安神宮周辺（全員参加ではなかったのが残念）。



かつて20年近く前、毎年、宇治川は平等院近くの中州、塔の島・橘島で、満開のソメイヨシノなどさあられぬ体で大変にぎにぎ行われしペンギンの花見。

時に宇治市にある某作業所の皆さんと一緒にすることもあった、ちょっとした一連隊でのボルテージ全開のどんちゃん騒ぎは、かの地を源氏物語の最後の舞台（宇治十帖）に選んだ紫式部の後悔を誘うレベル。

持ち帰り寿司の大サイズが2つ3つ。参加者が思い思いに持ち寄りし一品一品。ご実家（長岡京市）で収穫の筍をメインとした高橋公子さん手料理満載の重箱。場所取



2019年4月4日 岡崎にて



り役の三宅さんが“開宴前に”山と積み上げし缶ビールの空き缶群。

これらのごちそうを囲んでの大花見は通りがかりの酔客の二度見を誘い、時には人見知りをしないスナック経営の年配のママさんが宴席に飛び入り参加して大いに盛り上がり、後日何人かのメンバーを祇園にほど近いママさんの店に繰り出させる経済効果。

ある年のこと、しばし酔いの醒めたユグが何気にまわりを見廻すと、何やら気むずかしげに両腕を組み、仁王立ちでこちらを凝視して身じろぎもしない、おそらくリタ

イア数年ほどの体格良さげな老紳士一名。

後から思い返すと、眼前のペンギン花見の面々を逐一じっくり観察していた様子。

その傍らには、

『これちょっと、も～お父さんて！ なにをそんなよその人らの花見なんかじーっと見てんの！？ も～早よ帰るえ！ さっさとついて来よしな！』

と言わんばかりにその老紳士の袖を引っ張る、奥さんらしき年配の女性。

仁王立ちの眼前のブルーシート上に展開されるは、重度障害者による泥酔・飽食・沈没・熟睡・口論・議論・爆笑・粗相・転倒・号泣・嗚咽…いかようにも表現可能、かの鳥獣戯画もかたなし、平等院の鳳凰も面目なしの阿鼻叫喚。

（まあ、ウチらペンギンて、どこでも大概こんなもんやからな～。どうせこの人も、やかましいいうて文句言いに来はったんやろな。ちょっと謝っとこか。）

その仁王立ちに向かっておそろおそろ、
『あの～ちょっとすみません。だいぶやかましいて迷惑してはるんでしょうか…もしそうでしたら、ホンマに申し訳…』

そういつて声をかけた刹那、こちらを睨みつけていた老紳士がほぼ大音声に、

『これが花見や！』

怒鳴りつけられる覚悟のユグが完全に呆気にとられているのを尻目に、ようやく傍らの夫人のせつつきに反応して、花見のブルーシート前を後にしはじめたものの、何度も何度もこちらを振り返りながら立ち去って行くどこか名残惜しげな老紳士の後ろ姿…。

時代は飛んで今現在、中書島周辺の宇治川派流の桜見物に赴きしおり、そこかしこに花見の酔客が散見されるも、かつての塔の島にてペンギンが繰り広げしそれをはるかに凌ぐ酔態に出会うこと皆無に近し。

春うらら ペンギンどもが 宇治の恥



2001 年宇治塔の島花見

筋蠶主汗（キンジス・ハーン）自伝 その 六

『筋蠶主汗（キンジス・ハーン）
障害者の自立生活への“腹のくくり方”を
改めて振り返ること』

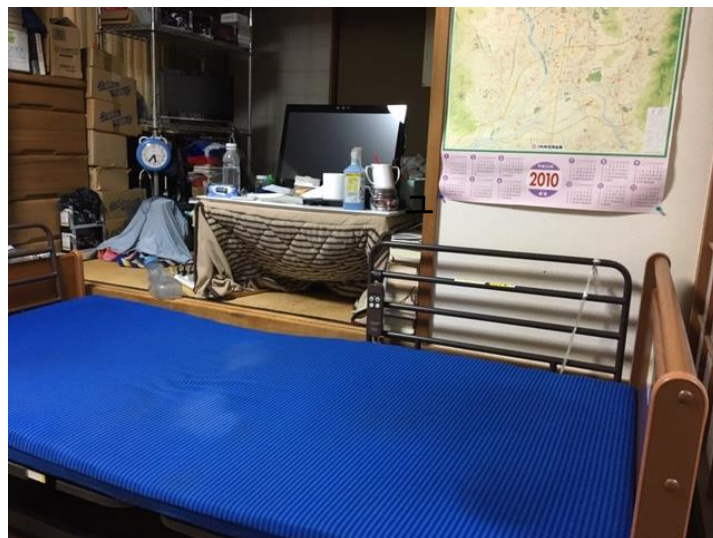
ユグ

以下はペンギンニュース37号の3頁目に載っているユグの文章の抜書き。『…1997年の秋に…自立生活を始めました。…ただ、このときは自立生活への“腹のくくり方”が全く甘かったせいで、ほぼ半年ほどで実家に戻る結果となってしまい…（この“腹のくくり方”は自立生活にはきわめて重要なので、今後のニュースで必ず触れるということだ）。』

「障害者の自立生活への“腹のくくり方”」この大まかな意味としては、「仮に介護がほとんど確保されておらず、自力での起居・食事・排泄もままならず、たとえ寝たきり・空腹・たれ流しの状態になってしまったとしても、自立生活を続けていく覚悟というか、気構えでいること」

実際のユグの自立生活にからめて言いますと、普段自宅では、ベッドの上で座位を保持して生活しています。床上の高い座敷の上がり口ギリギリにコタツを置いて、床の電動ベッドの長い辺を座敷上がり口（コ

タツの正面）と平行にほぼ密着させています。高さを上下に調整できるベッドを椅子



替わりにしてコタツ正面に座位を取ります。

長方形のコタツ机にはパソコンなどがあり、ときにコタツで弁当を使ったりもします。

コタツの横には小用を足すための尿器などがおいてあります（大の用足しは、介護の人が居る時のみトイレで済ませます。体力・筋力が落ちているので、何度もトイレまで行けません）。

そこで就寝・睡眠のため横臥する時間まで座位で過ごすのですが、小用を足す際にバランスを崩して不本意な体位で倒れ込んでしまった場合、介護の人の手助けがない時だとそのまま動けないので、緊急の救助をしてもらう介護者を携帯で募らなければなりません。携帯電話はユグのすぐ傍に置いておかねばなりません（緊急時の介護に来てもらえる人との関係性を日頃の暮らしで常に築いておくことも重要です）。



横臥している状態から電動ベッドを起こして座位を取る場合も、一人の時は危険があります。ある早朝にベッドを起こした時は、身体にうまく力が入らずバランスを崩してしまったことがあります。

その時は不覚にもベッドのコントローラーと携帯電話を両方とも床に落としてしまい、朝の介護の人が到着するまでの2時間半ほどでしたか、無理な体勢でさらに強い尿意をこらえながら救助を待ったこともあります。

介護を入れる側（障害者）と 介護に入る側（健全者） 双方での手違いや勘違い、失敗やトラブルも頻繁に起こります。

介護に入る予定日をその翌日だと間違えていた介護者に急いでこちらに向かってもらったところ、大阪まで直通で止まらない特急列車に誤って乗車したために、ユグ宅への到着が大幅に遅れたことがあります（午後2時到着なのが、午後6時に）。

介護者がユグ宅に入る時は、ダイヤルロック付きの集合ポストに置いたカギを出して、玄関を開けて入ってもらうルールになっています。この際にも実にいろいろなことが起こります。

ユグ宅から帰る際の介護者が施錠後に、カギを入れた古封筒を別のお宅の集合ポストに誤って投函してしまっただけでそのまま出てこなくなったり、きちんと掛けられていたはずのダイヤルロックがどういうわけか無くなってしまうたり…。

ユグ宅のカギ絡みで起きたことは、ちょっとしたニアミスを含めれば、いちいち記憶してられません。

ただその中で思うようになったのは、「ミスが起きないように常に予防線を張っているよりも、様々なミスに対応できるメンタルをしっかり持つておく」というほうがかえって疲れないのとちゃうか…ということでした。

ここでまた “腹のくくり方” の話を。

上に書いてきた自立生活での諸々は、ユグの自己決定から始まっています。たとえ身動きのできない状況に陥ったり、介護でのミスがあったとしても、不自由ながら自ら選んだ自立生活で起きたことは、すべてユグの責任に帰されるべきだと今では考えられるようになっていきます。前号に書いたことは、今のユグの心境に比べれば20

代半ばの頃の“腹のくくり方”は全く甘かったということです。

あと、一度実家に戻ってしまった頃とは、ユグ個人の状況が全然ちがうという点は大きいと思います。

実家のことを言えば、長年の事情から障害を持った身体では生活できないので、自立せざるを得ず、いま住んでいる市営の車イス住宅で住まないといけない…ということを選択肢も限られ、昔のような甘い“腹のくくり方”では生きていけないし、どうしても“覚悟をきめる”“腹を据える”必要性が出てきます。

ごくたまに、親元などから離れて自立生活を、という障害当事者の方の相談を受けることがあるのですが、その際は心を鬼にして、あらかじめ納得いただいた上で自立生活での厳しい事情やアクシデントの体験を話して、それからその人がどう自己決定されるのかをよく考えてもらうようにしています。

はじめの頃は同じ障害当事者であるユグが、現実のシビアな話ばかりを並べ立てて、ご相談下さった方の夢というか希望を台無しにしているようで心が咎めてばかりでした。

でもユグの体験で言うと、障害者であろうとなかろうと、退っ引きならない人生の転機が訪れて、身の振り方を考えねばなら

なくなった時というのは、それこそ“他人に相談ブツこいてる暇なんぞ、あるわけないやないか！”というのが本音です。さらに言えば、他人に相談できるだけの余裕がまだあるということでしょうから。

なので、相談してこられた方に自立生活のシビアな場面を話して幻滅させてしまったとしても、本当に切羽詰まっている時にはユグの話なんか思い出さないであろうとして「ま、ちとキビしい内容でもエエやろ」思うようにしています。

前にいつかの号で、高橋公子さんに初めてお会いしたことを書きましたが、公子さんがユグに対して思っておられたことなんて、「どうせこんな子はちょっとキツイこと言ったらすぐ怒って来なくなるやろうし、もう二度と会うこと無いんだからボロクソに思い切り言うといてやったらエエのよ!」。こんな感じで、もうケチョンケチョンでしたから。

それを考えると、相談してきてくれた人に、ユグはそこまでの言い方はしない…というか、したことはありませんので。まあ大丈夫だろうと思います。

今回もまた取り留めなくなってしまうましたが、前号での“腹のくくり方”についての補足を書いてみました。お読み下さった方にお礼申し上げます。

きむきがんさん一人芝居

『キャラメル』を観て

3月30日夕刻、私はアバンティ9階にある響都ホールへ急いだ。昨年12月に情報を知ってから今回こそ絶対見逃したくないと心待ちにしていた、きむきがんさんの一人芝居で旧日本軍性奴隷問題をテーマにした作品『キャラメル』をこの目に焼き付けるために!!

ホールに着くと入口前で、昨年4月に辺野古へ一緒に行ったKさんとバッタリ。再会を喜んだが、Kさんは「当日券が無いのよ」という。そうなのだ、私はチケットをメールで申し込んだが、ほとんど1ヶ月位前には売切れるほどの盛況ぶりだった。後からKさんも知人を通じて何とかチケットを譲ってもらえたらしく、私の隣に無事着席。

この芝居は、これまできむきがんさんともう一人の二人芝居で演じてこられたが、今回はきがんさんが8名もの登場人物を演じ分ける一人芝居ということで、より注目の舞台となった。

これから話すあらすじと感想はネタバレになるかも知れない。しかし『キャラメル』の公演は頻繁に観られるものではない。どこかで上演が決まっても発売から1ヶ月ほどでチケットが売切れてしまうことも多い。



まずこの公演のことを知ってもらって、観る機会があれば逃さず生の舞台を観てもらいたい。非常に重いテーマを考えさせ、怒り、悲しみ、苦しみだけではなく、思わず大笑いしてしまうような場面も交えながら描かれる秀作である。言葉では伝えきれないほどの感動と迫力のある一見の価値ある作品なので、ぜひ。

90歳のオクスンハルモニとスッキハルモニは同じ長屋で他に近所付き合いも少なく、ひっそりと暮らしていた。ハルモニの二人は、生きているうちは何一つ思い通りにな

らず、周りの眼を気にしながら生きてきたが、死ぬ時は誰に何を思われようが自分たちのやりたいように葬式をやろうと、どちらか残された者が先に死んだ者の面倒をみる約束をしていた。

オクスンハルモニは、少し前から認知症を患い、赤ん坊の人形をあやしたり、「女学生の制服が着たい」と言ったり、「自転車に乗りたい」と言い出した。まるで若かった時の自分ができなかったことを取り戻そうとしているようだった。

そんなとき屈託のない現代っ子のリョンミが毎日自転車で朝鮮高校に通っている途中で、このハルモニたちと知り合いになった。そしてオクスンハルモニが亡くなり、彼女の希望通りの葬式の準備をするために、スッキハルモニはリョンミに「あんたその制服のチョゴリのお古が無いかな？」と相談を持ちかけたのだ。

女学生の制服を着て自転車に乗って旅立ちたいというのがオクスンハルモニの最後の願いだったのだ。故郷にいた頃に自転車に相乗りして憧れていた先輩への淡い恋心を思い出し、亡きオクスンハルモニと「先輩はあたしの方に気があったに違いない」「いや、私の方や」と空に向かって言い合いをしながらも淡々と葬儀の準備を進めるスッキハルモニ。

オクスンハルモニの死装束を丁寧に着付

けて、「一人ではお棺に入れられないから」と独り言をいいながら、客席から観客を巧く招き入れ手伝いをさせる。葬式の祭壇が整った頃には観ている客席の者もすっかり弔問客となる案配。

数少ない昔の知り合いが弔問に来ては、関係性に不つり合いな程の大層な嘆き悲しみ方をしては、チャッカリと供え物のお下がりをバッグに詰めて帰る人もいる。その辺りまではお葬式の場面にもかかわらず、きがんさんがそれぞれ巧みに演じ分ける人間味あふれる個性的なキャラクターにつられて笑いがこぼれる。

スッキハルモニだけになり祭壇に向かって幼い頃の思い出話をする。日本人に故郷は占領され作物も根こそぎ搾取され、食べる物がろくに無く、道に落ちていた一粒のキャラメルさえオクスンハルモニと奪い合いをして「泥棒！」と言ったことを詫びながら、「これは私が買ってきたキャラメルやから安心して食べて」と涙ながらに供える。

ハルモニたちは自分たちの素性を誰にも話さずに生きてきた。14,5歳の頃、キャラメルを配る日本人や教師、近所の人たちがいて、「日本に行って働けば、ご飯もきちんと食べられるし、親にも仕送りができる」という甘言に応じたばかりに騙され、戦地へ送られ日本兵のための「慰安婦」にされてしまった。終戦まで食べ物もろくに与え

られず、1日20名～40名の日本兵からの性暴力を受け、身体が腫れあがって痛くても許されず、殴られたり銃剣で身体を刺されたり、麻薬を打たれるなど地獄さながらの環境で、身も心もボロボロになり命からがら何とか生き延びてきた。何年経っても痛めつけられた心身の傷は消えず、誰にも話せず故郷にも帰れなくなった。

「私の人生を返してくれ!! 15歳の私を返してくれ!! それができないのならせめてきちんと謝れ!!」と、スッキハルモニは全身を震わせながら激しく慟哭を挙げる。それは10万人とも20万人ともいわれる声を上げられなかった被害者たちの叫びと重なり、更に大きく反響し合うように聴こえた。

芝居のあらすじ紹介はここまでとさせていただき、「旧日本軍性奴隷問題の解決を求める証言集会京都」発行の資料を参考に、今自分が知る限りでの旧日本軍性奴隷問題について思う事を書いておこうと思う。

この問題が一般に知られるようになったのは、1991年に被害女性の一人、金学順さん（当時は韓国で暮らしておられた故人）が名乗り出て体験を語り始められてからのこと。

日本政府は賠償問題について、サンフランシスコ講和条約と二国間条約ですべて解決済みで「法的責任はない」という立場をとっている。そしてこれまで政府の要職に

あるものがこの件に関して発した談話として「河野談話」と「村山談話」があるが、どちらも「これが最大のお詫びに近い談話か?」と思うほど通り一片のことしか書いて無く、あれほど酷い暴力を受けた被害者の方々の心に響くような反省の言葉は未だ述べられていないように思う。そして「償い事業」としては1995年～2007年まで「女性のためのアジア平和国民基金」を設立し、国民からの募金を集めて、韓国・台湾・フィリピンの被害者を対象に償い金と医療福祉支援金の支払い、インドネシア・オランダでも福祉事業を行なったそうだが、多くの被害者からは「日本政府からの公的な謝罪と賠償でなければ尊厳は回復しない」と受け取りを拒否された。国連人権委員会などからも「国民基金をもって日本政府が責任を果たしたとは言えない」という報告がでている。

そして自分の無知に今更ながら驚くのだが、8～9年ほど前に慰安婦像設置の件がニュースになるまで、性奴隷被害者の方々の多くが15歳程の少女だったということも知らなかったし、近年に『鬼郷』という映画を観て改めてその酷さを思い知らされた。

軍の直接関与があったかどうかを問題にする政治家もいるが、責任逃れをして問題を矮小化しているとしか言いようがない。一例では、旧海軍の主計中尉だった中曽根元首相がインドネシアで「慰安所」設置の

担当者であったことを示す資料が防衛省の文書から見つかったという事実もあり、本人も回顧録に「慰安所を作ってやったこともある」と書いていたにも関わらず、日本軍性奴隷制度とは関係ない「碁を打つ休息所」だと、明言を避ける卑怯な態度をとっている。

故・水木しげるが南方の国へ兵隊として招集され、無残な戦闘と空腹に苛まれた様子を体験に基づいて描かれた劇画『総員玉

砕せよ！』にも「慰安所」に群れを成して並ぶ兵隊の場面があった。

性奴隷の被害者の方々に対してどんな償い方をしてもその人生を元に戻すことはできないが、過去に犯してしまった大きすぎる過ちの真実をたとえ苦しくてもしっかり見つめて、未来にはもう二度と絶対過ちを繰り返すことのないよう一人一人が学ぶしか、報いる方法は無いと思うのである。

繁 朋子

私の平成（その１）「パソコン通信の巻」

繁周作

テレビやSNSでも「平成を振り返って」みたいな番組や記事を多く見かけたが、私は元号制度に否定的なので、そういうのはやりたくないのですが、まあ平成と言えば30～50歳代という人生の中盤を過ごした時代であり、一区切りとして大雑把に振り返ってみるのも悪くないかな？と思い書いてみることにした。

インターネットが普及する10年くらい前、平成が始まる少し前の1986年「パソコン通信」という文字でやり取りする通信サービスが始まった。私はその当時は社員数100人くらいのパソコン関係で仕事をしていたので、「すぐに知って始めた…」と言いたいところだが、その頃は仕事に追われながらも結構楽しかったし、私的には

になるとレンタルビデオを借りてきて映画（時々？●●●ビデオ）を（袋入りの不二家のピーナッツチョコと1リットルの淡路島コーヒー牛乳を飲み食いしながら）夢中で見ていたので退屈もせず、そこそこ楽しく暮らしていたのでパソコン通信なる見ず知らずのものに興味を示す暇もなかった。

ところが、それから一年くらい経ったある日の昼休み、上司から「繁くん、パソコン通信やってるの？私もよく知らないんだけど、あれって文字での通信だから繁くんみたいな言葉が不自由な人でも関係ないしいんじゃないの？障害者の仲間を集めてグループを作ってやったら楽しいんじゃないかな？〇〇課長もやってるそうだから詳しく聞いてみたら！？」と言われ、「！！！」

と私。

早速、その課長のデスクに行きお話を聞き、「どんなものか！」「何が必要か？」「いくらくらいかかるか？」などを聞いて、その気になりやすいイージーライダーの私のこと。すぐにやる気になり、その次の週末に大阪の日本橋にいそいそ出かけて「モデム」なる電話線とパソコンを繋ぐ装置を買ってきて、それに同梱されていたパソコン通信の会社の会員申込みのハガキを書いて送った。数日後に会員証とともに接続先一覧とIDとパスワードと会員規約が書かれた書類が送られてきた。勿論会員規約なんて読まず、逸る気持ちを抑えて、まずモデムを介してパソコンと電話線をつなぎ、パソコンに接続用ソフトをインストールし、自宅から最寄りの接続先とIDとパスワードを設定して、パソコンを操作して接続した。

早速、障害者のグループを作るべく「グループの作り方」を読み始めると、最初の方に「まず類似のグループがないか確認しましょう！」と書いてあった。「うーん、なるほど…でもまさか！？」と思いつつも「障害者」で探してみたら…。なななんと、あるではないか！その名は「ハンディ・コミュニケーション」。しかも「一周年おめでとう！」のメッセージが！！(^_^)

「ガーン！もうあるではないか！？しかも一年も前から！！」大ショックだったが、

「まーっ私が思い付くこと（正確には私が思い付いたわけではないが）くらい、誰でも思い付くわな…」と思い直して、恐る恐る「こんにちは！はじめまして！シゲと申します。京都人です、よろしくお願いします」と書き込みをしてみた。すると「シゲさん、はじめまして！ハンディSIGへようこそ！！」みたいな歓迎メッセージが数十通も届いた。これには驚きと喜びを隠せなかった。SIGとは Special Interest Group の略で、「特定の興味ある事柄について、その道の専門家の考えを聞いたり、メンバー同士が互いに知識や情報を交換する場」のことで、ハンディSIGは「障害者が互いに知識や情報を交換する場」だった。

●異種障害者間対話

今現在でも障害者の運動・活動では「障害種別を越えた連携」が叫ばれているが、パソコン通信の世界では遊びのレベルでかつ、ほんの一部だけが実現していた。例えばそれまでは「それぞれ重度の聴覚障害者と視覚障害者が会話することは不可能というのが常識だった」し、実際にも困難だったに違いない。ましてや普段の会話を日常的にするなどという事はパソコン通信以前には考えられなかっただろう。

ただ、それは意図したものではなく、パソコン通信の参加者数自体が少なく障害別に分けられなかった…というのが実情だったのだろう。

●オフラインミーティング（オフ会＝飲み会？）

オフラインミーティング（略して「オフ会」「オフ」）はふだん通信（オンライン）で繋がっている者同士が、実際（オフライン）に会うこと。で、それが大人同士だと必然的に飲み会となる。ちなみに現在のインターネットで知り合った者同士が会うときも「オフ会」と呼ぶことが多いようだ。

●手話・点字ブーム？

ただ、当然ながらオフ会になるとパソコン通信のようにコミュニケーションがスムーズに行かない。最初は聴覚障害者にはパソコンや筆談で伝え、視覚障害者には口話の出来る聴覚障害者や健常者が伝えていたのだが、オフ会の回を重ねるにつれ、関係が親密になるにつれて「もっとスムーズに会話したい」という欲求が高まっていった。そこで、聴覚障害者以外は手話を学び、聴覚障害者は点字を学ぼうとした。

●ネット恋愛も…

未婚の男女が集えば自ずと恋愛感情が芽生えるのも自然の成り行き。ただ、やはり障害の有無や障害の種別を越えての恋愛や結婚はなかなか成功しない事が多いのが現実なようだった。私が知る限り、私が経験した限り(^_^)では残念ながらそういうケースが多かった。さすがのパソコン通信にも、そこまでの神通力はなかったようだ。

●宴の終焉

そして時が過ぎパソコン通信のオフ会自体も 1990 年台初め頃には何時の間にか立ち消えになっていった。

その経緯は詳細には分からないが一つは「気の合う仲間だけでやるようになった」事。仲間ハズレにされた側からは通称「裏オフ」と呼ばれ不満が噴出した。そこにはどうも「身体的に動きやすい軽度な者が、より重度な者と一緒だと介助したり、待ったりすることが多くなるため、自分たちが楽しめない」という思いがあったようだ。その思いが「差別だ」という見方も出来るかも知れない。が、とにかく一時期は「障害の枠を越えてみんなで楽しく一緒に生きていこう！」という雰囲気ではあっただけに、残念というか「やっぱりそうなるか!？」という気持ちではあった。

●パソコン通信で一番嬉しかったこと

ここで終わると「やっぱりな～」となるだけだと思うので、「私がパソコン通信で一番嬉しかったこと」を書いて終わりたい。

それは「スキー体験が出来たこと」だった。

私が子供の頃から少なくとも 30 歳になる頃まではスキーブームが続いていた。私もずっと憧れてはいたものの「私には無理だろう」と諦めていた。

ところが、パソコン通信で知り合ったある男性は私と同じ脳性麻痺で失礼ながら見た目少なくとも下肢は私より重度に見えた。

その彼が「スキーをやっている」と聞き、軽率にも「彼が出来るなら私にも出来るかも」と考えたのだ。(その実、彼は子供の頃からスキーをやっていて、そのために毎日ほぼ欠かさず何キロもウォーキングしている事を知ったのはかなり後のことだった)

そしてその思いを同じパソコン通信の仲間で仲良くしていた(可愛がってもらっていた)私より少し年上の聴覚障害の女性に伝えたところ「よっしゃ!私に任せとき!」と言ってくれた。これも私は知らなかったのだが、彼女もかなりスキー歴は長く腕前もかなりのものだったのだ。聞けば「スキーのコーチを知ってるので紹介する」というのだ。程なくして現れたのは見るからにスポーツマンらしい聴覚障害の男性だった。

その男性に数回ゲレンデに行ってコーチしてもらった結果、緩斜面を自分でスキー板をズリズリ引きずりながら登っていき、平坦なところがあつたらそこでスキーを履きズリズリズリズリっと滑って降りられるまでになり、それだけでも楽しくて嬉しくて何度か連れて行ってもらったのだが、三十代中盤になると楽しさよりしんどさの方が上回ってきたことと、あの「よっしゃ!私に任せとき!」と言ってくれた女性がいつの間にかパソコン通信から消えてしまい。私のスキー人生は程なくして終わってしまったのだった。かなり後年に風の便では「脳出血で倒れて島根の実家に帰ったらしい」

と聞き「一言お礼が言いたかったな」と無念でならなかった。ちなみに男性コーチの方は何年か前に facebook では再会していたが、相変わらずお元気そのもののスポーツマンぶりでスキーは勿論、夏はカヌーもやっているとのことで、私も数年前からカヌーに乗り初めたものの2年目くらいで転覆して、私にはライフジャケットが役に立たないことが分かって未解決だったので、昨年 facebook を通じて連絡したら、軽く相談に乗って下さり、20年ぶりくらいでお会いしてほぼ解決し、あとは最終テストを待つばかりで、お蔭で今年はカヌーに復帰できそうだ。



【ペンギンの会 2018 年度の行事・できごと】

☆4月5日（木）

お花見

場所：京都府立植物園



☆9月9日（日）

納涼会

場所：ホテル京阪京都 光林

☆10月28日（日）

被災障害者救援街頭カンパ

場所：四条河原町

※募金額 ￥8,290-



☆11月26日（月）

レクリエーション旅行

場所：モクモク 京都店

※9月に予定されていた滋賀県への日帰り旅行が荒天で中止になったための代替企画



☆3月17日（日）

被災障害者救援街頭カンパ

場所：四条河原町

※募金額 ￥34,564-



【2018 年 4 月～2019 年 3 月までペンギンの会に会費・カンパをいただいた皆様】

(敬称略・順不同)

☆月会費

小山弘 李清美 湯口真 繁朋子 繁周作 井上緑

計 4 万 8 千円

☆年会費

正司拓生 松浦武夫 森岡均

計 1 万 8 千円

☆カンパ

矢野恵子 皆川夏樹 北角和恵 河内啓介 馬庭京子

河村史子 東真理子 藤田光恵 岩本豊・京子

湯口憲子 吉田信吾 浦辻宏昌 村上峰葉 入江泰

里中悦子

計 9 万 7 千円

総合計 1 6 万 3 千円

以上の、会費・カンパをいただきました皆様、
そしてその他ご支援をいただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

自立障害者グループ ペンギンの会

〒612-8411

京都市伏見区竹田久保町 62 番地

足立ハイツ竹田 132 号

(地下鉄烏丸線 くいな橋駅 徒歩 4 分)

電話：075-755-8177 (FAX 共)

E メール：pengin.kai@gmail.com

ホームページ：<http://pengin-kai.jpn.org/>

「ペンギンの会」で検索